

平成22年 3月31日現在

研究種目：特定領域研究
 研究期間：2005～2009
 課題番号：17083027
 研究課題名（和文） 都市居住に関する日本と中国の場所論的比較考察
 研究課題名（英文） Comparative Study on Urban Dwellings between Japan and China through the Theory of Place
 研究代表者
 菊地 成朋（KIKUCHI SHIGETOMO）
 九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
 研究者番号：60195203

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国の伝統都市を対象に、その構築環境を住居史学および環境心理学的視点から検討し、日本の伝統都市と比較することによって、都市居住に関する比較文化論的考察を行うものである。寧波・紹興・広州の3都市の歴史的街区を対象として実地調査を行い、その空間構成と居住特性を把握した。それを博多・柳川・高田と比較し、アーバン・ユニットとしての町家、水辺の生活空間、都市の中間領域などについて考察した。

研究成果の概要（英文）：This study analyzes built environment in traditional cities in China from viewpoints of architectural history and environmental psychology, and examines urban dwellings through the theory of comparative culture by comparing them with traditional cities in Japan. We surveyed traditional areas in three cities: Ningbo, Shaoxing, and Guangzhou, and we appreciated the space constitution and its habitat characteristics. We compared with Hakata, Yanagawa, and Takada, and deliberated on merchant housings as urban unit, living space along the waterside and the middle realm of the city.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,900,000	0	2,900,000
2006年度	2,900,000	0	2,900,000
2007年度	2,900,000	0	2,900,000
2008年度	2,900,000	0	2,900,000
2009年度	2,900,000	0	2,900,000
総計	14,500,000	0	14,500,000

研究分野：建築計画

科研費の分科・細目：建築学 都市計画・建築計画

キーワード：中国，人間生活環境，場所論，都市居住，比較居住文化

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国では、1990年代から本格化した改革開放政策により、沿海部の大都市を中心に急速な都市開発が行われてきた。それは都市空

間だけでなく、そこで営まれる生活も大きく変質させている。住宅についても市場化が進められ、住宅が「公有」から「私有」へと移行した。この「私有権」の復活は、都市開発

や住宅の制度、さらに人々の住宅に対する考え方も大きく変えつつある。菊地は、そのような中国の住宅をめぐる今日的状況について、1999年より調査研究を行ってきた(科研基盤研究(B)2003-2004「中国の市場経済導入に伴う住宅所有権の発生とその住環境への影響」代表:菊地成朋等)。

一方、中国伝統都市については、建築史・都市史分野において、都市や住宅の構成原理や歴史的経緯に関する成果が上げられてきた。ただし、それら伝統都市においても、急激に発展する現代中国にあって、居住のあり様は少なからず変質を遂げていることが予想される。しかし、これまでの伝統都市の研究はもっぱら近代以前を対象とし、現代の状況についてはあまり取り上げられてこなかった。そこで、伝統都市の近現代の動向と、その中での居住文化の持続の問題を考察することを今回の課題とした。

(2) 建築学を専門とする菊地と心理学を専門とする南は、人間環境学研究院の同一専攻(都市共生デザイン)に所属していることから、これまでも学際的研究の可能性について意見交換を行ってきた。また、南は人々の行動から読み取れる「居場所」の観察や、都市の深層的記憶を捉えることを通じて「都市の精神分析」を行うという独自のアプローチを試みている。

それらの経緯から、都市居住を物理的現象と心理的現象を複合的に考察するような、新たな学際的フィールドワークを試行することが研究方法上のテーマとなった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、中国伝統都市を対象に、構築環境のあり方やその意味を住居史学・環境心理学的視点から検討し、日本における場合と比較することによって、場所論的考察を行うものである。具体的には、中国の伝統都市において、住居と都市空間、人々の生活についての現地調査を行い、空間構成と居住実態を把握する。そして、それら中国の都市における調査結果と、すでにメンバーが取り組んでいた日本の都市を対象とした研究結果をまとめ、両者を組上りにのせて日本と中国の都市居住に関する場所論的比較考察を行う。これまでの建築学や都市計画学が、空間を狭義の機能論的視点でのみ論じてきたのに対し、本研究は建築や都市に色濃く反映されている地域固有の歴史や人々の価値観を重視して、それらの意味を理解することを目標とする。

(2) 住居空間の理解:中国とくに江南地域の住居は、高い文化水準を有する社会背景のもとで、知識人層を中心にその空間構成や細部意匠を発展させてきた。多くの先行研究が、

空間構成のみを扱ってきたのに対し、ここでは住まいに対する居住者の価値観を含めて検討することで、中国の都市居住に関する理解を深めたいと考える。

(3) 都市空間の理解:都市空間における「居場所」の所在・配置と「道」の構成を、江南諸都市および日本の諸都市をフィールドとして比較考察を行う。特に、小さな社会的場の分布と、人々の相互行為を検討することによって、都市における場所性の発生過程を明らかにする。これらの事例を積み重ね、都市の心理学的形成史、あるいは「都市の精神分析」を試行することが狙いである。

3. 研究の方法

(1) 調査対象:寧波・紹興・杭州(浙江省)・蘇州(江蘇省)など江南都市を主な対象とし、とくに寧波と紹興では具体的エリアを設定して現地詳細調査を実施した。また、都市中間領域「騎楼」をもつ広州(広東省)について同様の現地調査を実施した。比較する日本の都市として、メンバーが以前より研究に取り組んでいる博多(福岡市)、柳川(福岡県柳川市)、高田(新潟県上越市)を取り上げた。これには、歴史的港湾都市としての寧波-博多、ともに水郷都市である紹興-柳川、中間領域である「騎楼」と「雁木」を都市構成要素としてもつ広州-高田という対比の意図が含まれている。

(2) 調査方法:寧波と紹興については、ほぼ同様の調査を実施している。住居史的視点から、地区内に残存する伝統的住居を対象に実測調査を行い、空間的・様式的特徴を解明するとともに、観察調査により居住者の領域形成を把握した。また、環境心理学的視点から、居住者や通行人が行き交う外部空間として、寧波においては伝統的住居の中庭と路地、紹興においては水辺空間を対象に、ビデオを用いた行動観察調査を実施した。

広州については、騎楼建築街とその後背地に形成された低層住居密集地区に関して実測調査を行い、その形成過程と建築的特徴を把握するとともに、ヒアリング・観察調査等によりそれぞれの領域での居住実態を記録した。

4. 研究成果

(1) 実地調査

①寧波月湖西側地区を対象とした実地調査を2006年に行った(菊地、南、柴田)。地区内に残存する伝統的住居を対象に実測調査を行い、明代以降の各時代の特徴を明らかにした。

この地区は街区構成が不整形で、歴史的建物がランダムな配置をとっているが、これは

月湖周辺が文化地区で、風雅に富んだ地形に文人や地主の別荘や隠宅が建設されたことに起因すると考えられる。それらの伝統的住宅は、近代以降の中国の激しい社会変動の中でも維持されてきた。ただし、それは当初に与えられた空間秩序や機能を伴った持続ではなかった。居住は社会変動に応じて幾度も変貌を遂げ、現在も出稼ぎ階層に対応する住宅として使われるなど、現代的状況に即した機能を担っている。

また行動観察調査では、中庭空間での行為が単一のコミュニティを形成して行われるようなものではなく、旧所有者・革命時の分配居住者・現代的な賃貸居住者それぞれによって空間への関わり方が異なり、相互のコミュニケーションが必ずしも成立していない状況が捉えられた。



図1 桂井巷地区構成 (寧波)

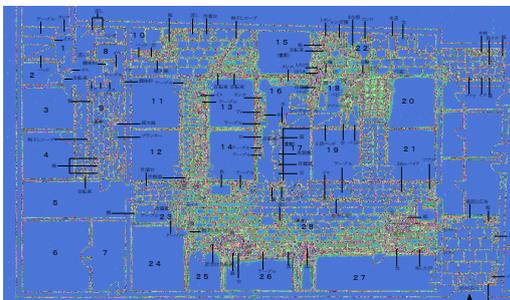


図2 清代住宅の現状 (寧波)

②広州騎楼街の調査を2007年に実施した(菊地、黒野、柴田)。近代期に開発された恩寧路、第十甫路、上九路地区を対象として、騎楼建築街とその後背地に形成された低層住居密集地区に関して実測調査を行い、その形成過程と建築的特徴を把握するとともに、ヒアリング・観察調査等によりそれぞれの領域での居住実態を記録した。

その結果、対象地区においては、騎楼街路と街区内部の居住地とが全く異なる構造で成り立っており、両者は空間的性格もかなり違っていること、当地区が計画性と自然発生的側面とを併せ持って形成されたこと、広州の騎楼建築においても寧波の伝統住宅に見

られたような錯綜した多世帯居住がみられること等が明らかになった。

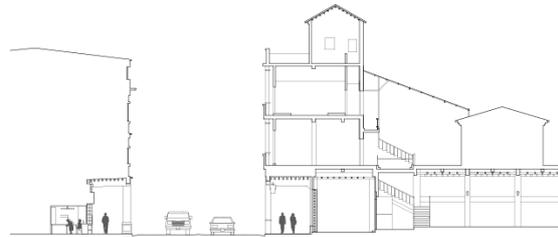


図3 恩寧路騎楼街路断面 (広州)

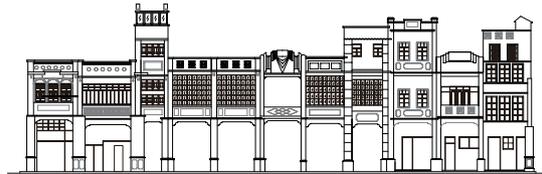


図4 恩寧路連続立面 (広州)

③紹興八字橋歴史街区の調査を2008年に行った(菊地、南、柴田)。伝統的構成を維持する水辺空間を実測し、水路・橋・オープンスペース・路地・建物・中庭を連続的に捉え、図面化した。その結果、「台門」と呼ばれる伝統的邸宅形式の存続が確認された。また、東街の道筋に沿って商店建築が並ぶ通りの形式が把握された。それに対し、水路際に建つ住居群は奥行の浅い長屋型の建物形式が多くを占めていた。

水辺周辺の居住者への聴取り調査では、寧波月湖西側地区にくらべ長期にわたって居住している場合が多く、コミュニティも比較的安定していることがわかった。ただし、それらは必ずしも伝統的なものではなく、むしろ近代以降に再編され、変化しながら現在に至っている。水際の生活景観の観察からは、水路は都市化によってその役割を変化させながらも、現在でも極めて有効に活用されており、この地区の生活サイクルを形づくる基盤となっていることが明らかになった。

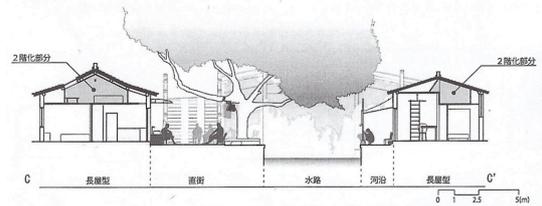


図5 八字橋北断面構成 (紹興)

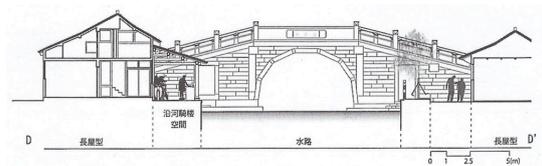


図6 広寧橋東断面構成 (紹興)

④日本の都市についても、これまでの成果に本研究に即した再検討を加えた。博多については、菊地が伝統的街区を対象とした調査を、南が祭礼「山笠」の参与観察による心理学的分析を行っている。柳川については、菊地が水辺空間に関する調査研究を再編集した。高田については、黒野が町家と雁木通りに関する調査研究をまとめた。

(2) シンポジウム

①2008年10月の「中国伝統都市の空間と場所」では、寧波の月湖西側地区の調査をもとに、都市理解の視点を検討した。このシンポジウムは、成果報告よりも共同調査を通じて浮かび上がってきた「場所論」をめぐる議論を目的としたものである。菊地が調査概要と対象地区の特性について説明を行った。月湖周辺は文人の居住地として一進型伝統住宅が建てられた地区であるが、現在は居住者の属性も権利も非常に錯綜した状況にある。柴田は、この地区では多様な居住者層がそれぞれ異なる空間への働きかけを行っているが、それぞれのアクティビティは独立しており、あえて交渉をもたない作法によりこれらの場所が成立していることを、アニメーションを使って示した。南は、街路空間を題材に、現象学的なアプローチによる人々の居方と協和的な観察という視点を提示した。それは、そこに居続けることで理解される場所の性質に着目するものである。

②2009年12月には、中国での実地調査の共同研究者でもある湯国華教授（広州大学）、王潔副教授（浙江大學）を招き、国際シンポジウム「伝統的都市空間の保全と活用—日中比較の視点から」を開催した。これは、中国と日本の具体的な事例を題材に、アジアにおける都市空間の理解と歴史保全のあり方を議論することを意図したものである。湯教授は、広州の騎楼建築について、その形態的特徴と発展過程、現在の状況について解説した。黒野は、高田の雁木町家と雁木通りについて、その空間特性と近年の保全の取り組みを紹介した。王副教授は、杭州の伝統街区保全プロジェクトをもとに、現在の中国で取り込まれる歴史を生かした開発の手法について解説した。菊地は、ともに水郷都市として知られる紹興と柳川を例に、中国と日本の水辺景観の保全について論じた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計7件）

①牛島 朗, 菊地成朋, 柴田 建, 天満類子, 水路沿いの空間構成と利用形態—紹興八字橋歴史街区の水辺空間調査報告 その1—, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第16号, 2009.7, pp1-8

②天満類子, 菊地成朋, 柴田 建, 牛島 朗, 水路際に建つ住宅群の居住特性—紹興八字橋歴史街区の水辺空間調査報告 その2—, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第16号, 2009.7, pp9-14

③柴田 建, 菊地成朋, 柴田 建, 牛島 朗, 水辺の生活景の理解—紹興八字橋歴史街区の水辺空間調査報告 その3—, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第16号, 2009.7, pp15-24

④箕浦永子, 菊地成朋, 黒山 崇, 清末民国期紹興東街にみる伝統的商業空間の特質, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第15号, 2009.1, pp9-16

⑤菊地成朋, 柴田 建, 箕浦永子, 野田大輔, 歴史的街区における居住形態の変容—中国寧波月湖西側地区の調査報告 その1—, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第12号, 2007.7, pp19-26

⑥箕浦永子, 菊地成朋, 柴田 建, 野田大輔, 明, 清, 中華民国期の住宅の建築的特徴と街区構造の変遷—中国寧波月湖西側地区の調査報告 その2—, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第12号, 2007.7, pp27-34

⑦柴田 建, 菊地成朋, 箕浦永子, 野田大輔, 現代における街区構造の再編と居住実態—中国寧波月湖西側地区の調査報告 その3—, 都市・建築学研究 九州大学人間環境学研究院紀要, 査読有, 第12号, 2007.7, pp35-44

〔学会発表〕（計1件）

①菊地成朋, 近代中国の都市開発と景観変容, 第54回国際東方学会議シンポジウムIV予稿集, 2009.5, pp58-66

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菊地 成朋 (KIKUCHI SHIGETOMO)
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号：60195203

(2) 研究分担者

南 博文 (MINAMI HIROFUMI)
九州大学・大学院人間環境学研究院・教授
研究者番号：20192362

(3) 連携研究者

黒野 弘靖 (KURONO HIROYASU)
新潟大学・自然科学系・准教授
研究者番号：80221951

柴田 建 (SHIBATA KEN)
九州大学・大学院人間環境学研究院・助教
研究者番号：60325545